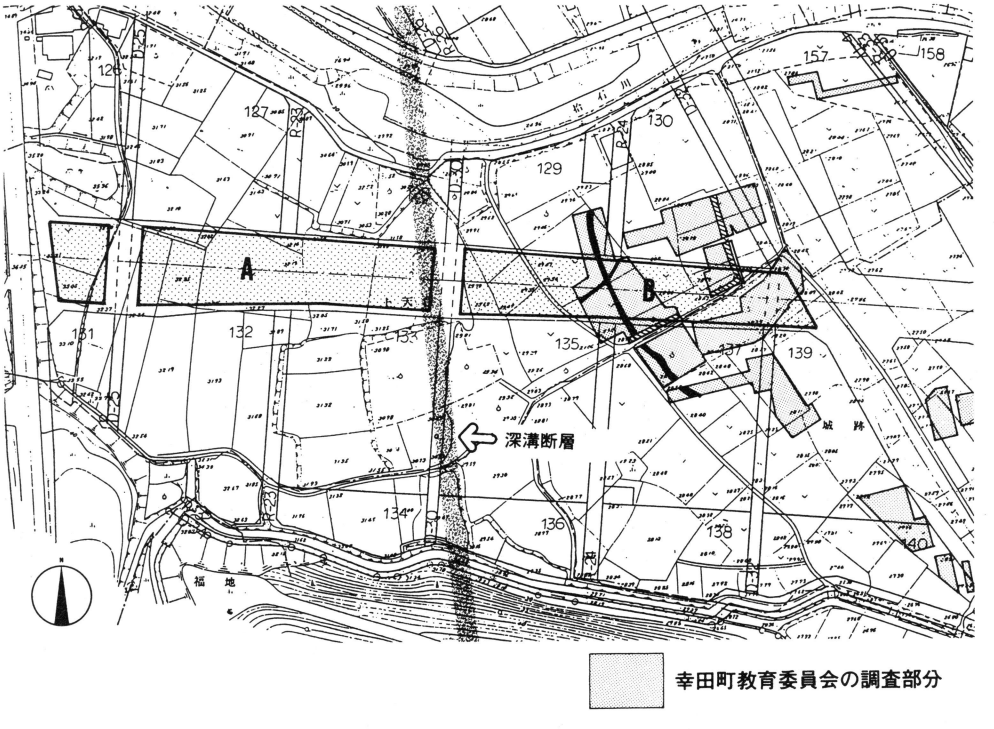
東光寺遺跡

調査の経過

東光寺遺跡は、額田郡幸田町大字深溝字上天白、字天白、及び字城跡にかけて所在する。この地区の県道蒲郡碧南線と同安城蒲郡線建設に伴い、愛知県土木部の委託を愛知県教育委員会が受け、当埋蔵文化財センターが今年度より調査を実施した。遺跡は、遺跡地図には、記載されておらず、県道建設に付随して行われた圃場整備に先立つ幸田町教育委員会の試掘調査によって確認され、昭和61年度から63年度にかけて６次にわたる発掘調査が同教育委員会によって行われている。この調査では、縄文時代から中世までの時期の遺物が出土し、主要な遺構としては、弥生時代及び中世の溝などが検出されている。これに基づき、今回の調査は、蒲郡碧南線の安城蒲郡線との交差地点より西側部分について２地区に分割して行った。(第１図)

遺跡は、美濃・三河山地の一部の東の遠峰山の山塊と西の三ケ根山の山塊の山挟部を流れる拾石川右岸に位置し、洪積台地の中位段丘面に立地する。標高は、調査区西半の89Ａ区で30～32m、東半の89Ｂ区で27～28mである。遺跡の南と西は三ケ根山の山塊によって、



第１図　調査区位置図（１/2500）

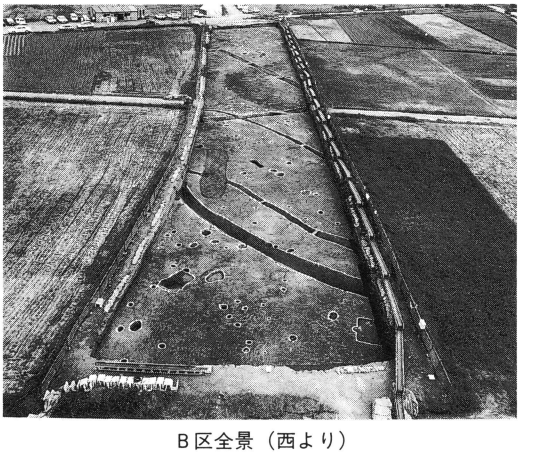
東と北は拾石川によって画される。調査区は、調査前は畑地で、西の拾石川に向かって若干傾斜する平坦な地形であるが、A区とB区の境界部は、深溝断層の影響で比高約2mの急傾斜地である。周囲は、近年までは畑地及び果樹園であったが、圃場整備によって区画された畑地となっている。

調査の概要

遺跡の基本層序は、1．灰褐色土(耕作土)　2．褐色土　3．暗褐色土で、深さ0.6m～1mで基盤の黄褐色砂礫土に至る。遺構の検出は、黄褐色砂礫土の上面で行った。検出された遺構と遺物は、Ⅰ：縄文時代晩期　Ⅱ：弥生時代後期　Ⅲ：奈良時代　Ⅳ：中世に大別される。以下、各時期の概略について述べる。

Ⅰ期：　Ⅰ期は、Ⅰ－1期とⅠ－2期の2時期に分けられる。Ⅰ－1期は、晩期中葉で、主な遺構としてはA区SD01とSK01がこの時期に属す。SD01は、溝状の窪地で、ほぼ南北にのび、幅7.2m　深さ0.5mを測る。埋土は、黒色土で多量の有機物を含む。SD01及び、これよりやや新しい時期のSD02の埋土中より東三河地方で稲荷山式土器として型式設定されている土器群が出土した。土器の他は、石製品では、打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錘、石錐、浮き、石棒、石冠が出土し、土製品としては、土偶、土錘などが検出された。Ⅰ－2期は晩期後半で、東三河地方の馬見塚式土器から水神平式土器の時期に併行する時期である。A区の中央部に比較的集中して、土坑群が検出された。また、A区西半で樫王式土器から水神平式土器の時期の土器棺墓5基が検出された。

A区全景（東より）

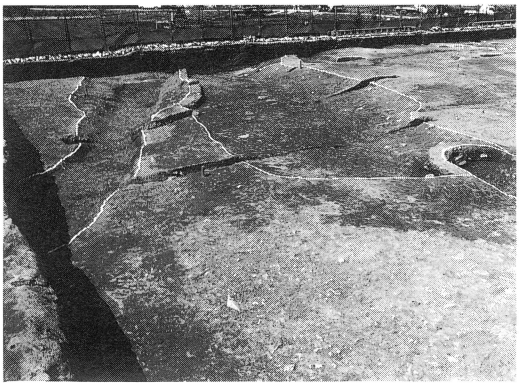


B区全景（西より）

Ⅱ期：　この時期の主な遺構としては、溝4条、方形周溝墓1基があり、全てB区で検出された。SD01・02・03は、北東から南西の方向であるのに対して、SD04はこれと異なり、北西から南東の方向である。規模に関しては、SD01・04は、検出面において幅2～2.4m　深さ1～1.2

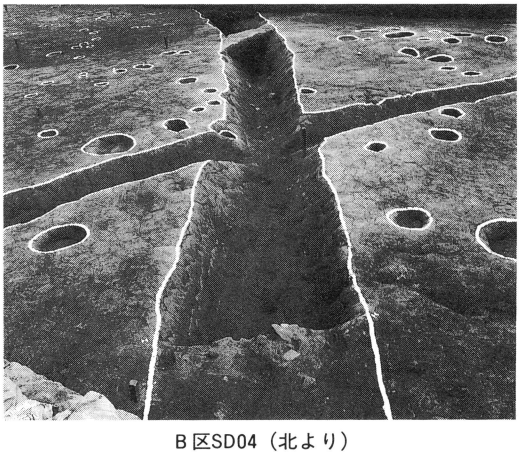
m　断面V字形、SD02・03は、幅1～1.2m深さ約0.6m　断面U字形である。SD01の埋土中より、欠山式土器が多量に検出された。SD03と04は、幸田町教育委員会の調査が既に行われており、SD04から後期の土器が多量に出土している。SZ01は、北西部に陸橋が一つある型式の周溝墓で、掘形は浅く、遺物はほとんど検出されなかった。ゆえに時期を確定しえなかったが、形態よりII期に属すものと考えられる。

III期：　B区で竪穴住居1軒が検出された。(SB01) 南半は調査区外で、東西2.2m検出面より深さ0.2mで床面となる。北辺中央に焼土が検出され、竈と考えられる。床面より、須恵器杯、土師器甕が出土した。

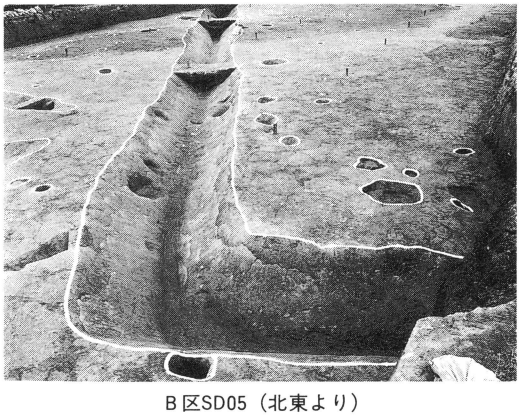


A区SD01・02（南より）

IV期：　IV期は、IV－1期の中世前半(13～14世紀）とIV－2期の中世後半（15～16世紀）の2時期に分けられる。IV－1期は、A区東半に土坑群が検出された。小形の土坑の大部分は、掘立柱建物の柱穴と考えられるが、明確に柱穴として並ぶものはなかった。また、埋土中より焼土、炭、人骨が出土した細長い土坑が2基検出され、火葬に関係するものと考えられる。A区の竪穴住居SB01～03は掘形が浅く、検出面より数cmで床面に達する。SB01は、東西3.4m　南北3.6m　SB02は、東西3.8m　南北3.8mで、SB01は北西隅に竈をもつ。これらの竪穴住居は、遺物がほとんど検出されなかったが、この時期に属すと考えられる。II－2期は、溝1条が検出されている。SD05は、検出面で、幅2m　深さ0.8m　断面は緩い傾斜のV字形からU字形である。埋土中からの出土遺物は少なく、15世紀から16世紀



B区SD04（北より）



B区SD05（北東より）

前半の陶器類、土師器が検出された。

他の時期の遺構としては、A区の東半部に近世の土葬墓と考えられる土坑が3基検出され、埋土中より人骨が出土した。また、同地区に直径約5m、深さ0.3mで、底部分に径30cm程の礫が投棄された状態で多量に出土した近世以降の時期の土坑を検出した。

まとめ

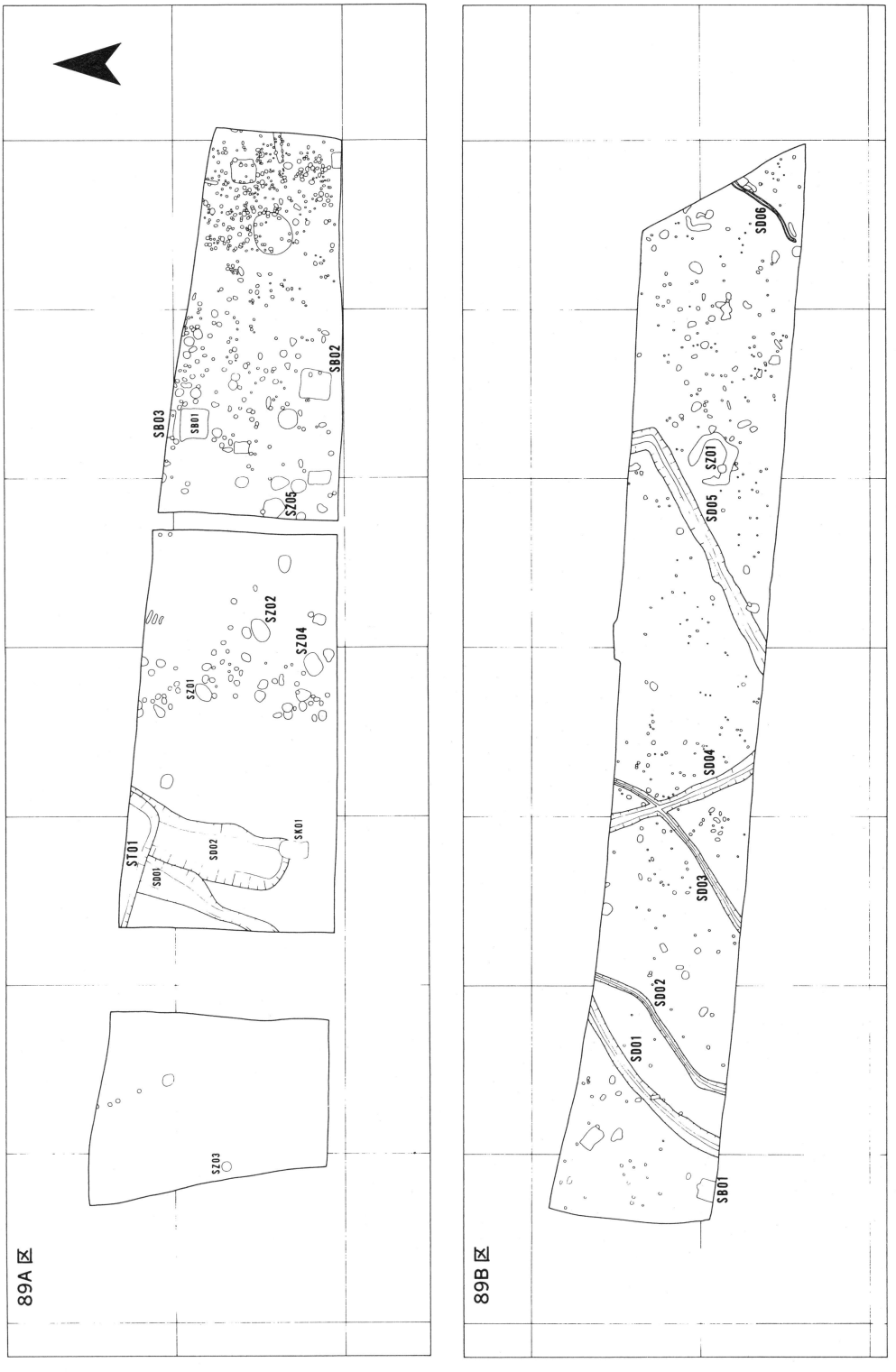
Ⅰ－1期とした縄文時代晩期中葉の土器資料については、宝飯郡小坂井町稲荷山貝塚の明治大学による調査によってほぼ同時期の土器群が検出され、稲荷山式土器として型式設定されている。また、同時に調査された豊川下流域の遺跡群の縄文時代晩期中葉から後葉にかけての土器の編年研究によってその位置付けがなされている。東光寺遺跡は、東三河に近接した地域にあるが、西三河における同時期の資料として、編年的な位置付けと地域的な型式差を検討することが、今後の課題である。

Ⅱ期については、弥生時代後期の溝4条が検出され、その内3条は、ほぼ同方向に走り規模及び形状から集落を廻る環濠の可能性が大きい。集落の中心はB区の東方向と推測され、小土坑が検出されているが、竪穴住居などの建物は確認されていない。方形周溝墓は1基検出されたが、細かい時期を決定できず、予想される居住域との時期及び位置的な関係は今後の調査に寄るところが大きい。

Ⅳ期には、A区の東半部に掘立柱建物と推測される柱穴が集中し、竪穴住居、火葬施設及び方形土坑などが検出されることから、中世の屋敷地と推定される。しかし、この時期に多くの場合認められる屋敷地を区画する溝などは確認されず、問題となる。Ⅳ－2期の溝は、室町時代後半に属し、復元した場合、地方豪族の居館に付随する堀程度の規模である。付近には、天白、城跡、裏門など中世の城郭に関連すると推測される地名が残存する。しかし、溝以外に城郭を構成する施設の遺構は確認されず、中心部と考えられる地区の今

A区SZ02　土器出土状態（南より）

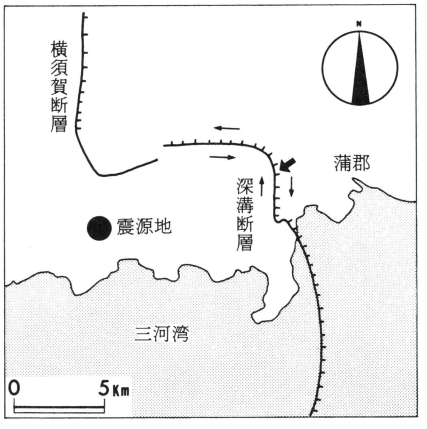
A区SB01　遺物出土状態（北より）


89A 区
SB03
SB01
SB02
SZ05
SZ02
SZ04
SZ01
ST01
SD01
SD02
SK01
SZ03
89B 区
SD06
SZ01
SD05
SD04
SD03
SD02
SD01
SB01

第 2 図　遺構図（1/800）

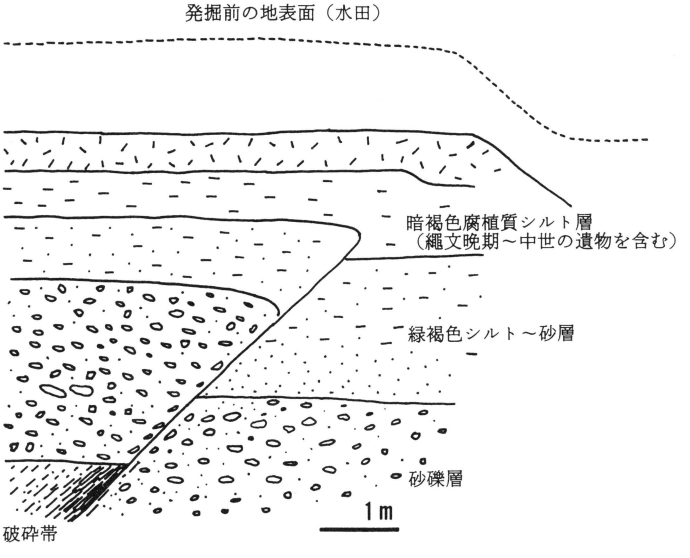
後の調査によって明らかになるものと予想される。

今回の調査では、A区の東端部をほぼ南北に横断する深溝断層を調査の対象とした。(第1図) 1945年1月幡豆郡幡豆町付近を震央として三河地震（M７．１）が発生し、三河地方を中心に大きな被害をもたらし、これによって横須賀断層と深溝断層が形成された。(第3図) トレンチによって深溝断層の断面を調査したところ、中位段丘の洪積層に逆断層が確認され、近年の他の調査と同様の結果が得られた。(第4図)　　(酒井俊彦)



第3図　深溝断層位置図

深溝断層断面（南より）



第4図　東光寺遺跡トレンチ断面における深溝断層の露頭スケッチ